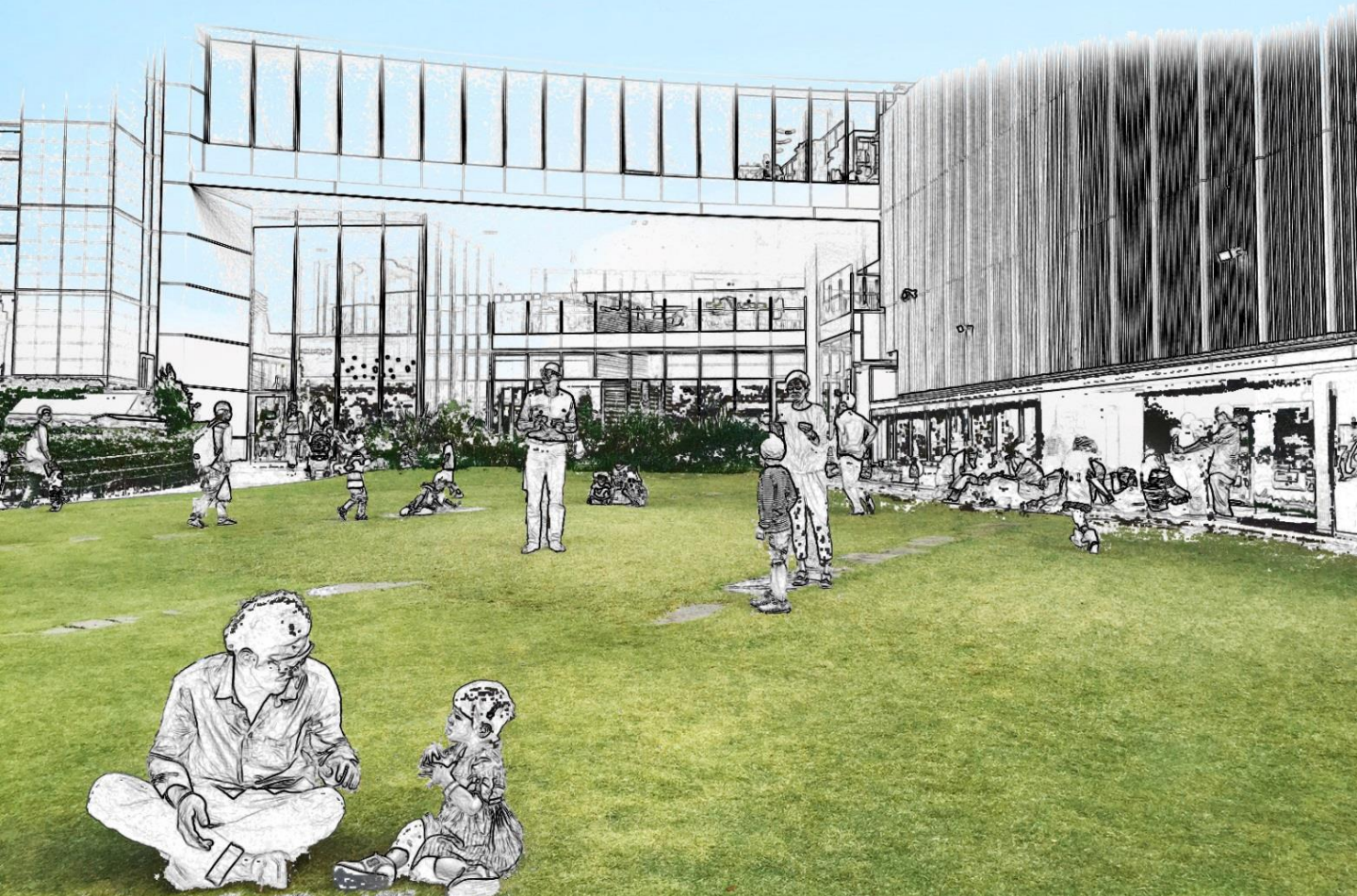
「広場づくりのコツ、あります。」

～新たなまちづくりの担い手のための　広場づくりの手引き（案）～
（街との関係・空間配置・利用者行動に関する知見から）



広場とは？

［立地・空間］広場の多様性・多機能性

・広場とはそれ単体で存在しうるものではありません。その先に何が接続しているか？周りに何があるか？など、周辺環境に応じて広場の性格は様々に変わってきます。広場のあり方は実に多様です。
・また、広場空間は建物、壁、植栽、座席、テーブル、照明、シェルターなど様々な要素とそれらの組合せによって、多様な機能を発揮します。

［行為］広場での人の行動・活動

・広場での人の行動は大きく「移動」と「滞在」の２つに分けられます。目指すべき広場像に応じて、広場に期待される活動は様々です。
・魅力的な空間では、必要に迫られて現れる行動だけではなく、意図的に楽しむための活動や、思いがけず他者とふれあう活動などもみられます。
・平常時とイベント時では、広場の利用者数・アクティビティ（移動や滞在に関わる活動）は大きく変化しますが、魅力的な都市生活という観点からは、どちらも重要な都市の舞台です。

［効果・効用］広場の効果

・効果的な位置に広場をもうけ、その広場空間の質を高めることは、広場そのものの魅力を高め利用者の満足度を高めるだけではなく、そこが街の回遊の拠点になるなど、街全体への波及効果が期待できます。
・その結果、持続性のある自主的な運営やコミュニティ形成も可能となります。

［評価］広場の評価について

・街全体の魅力向上のきっかけとなるような広場を整備するためには、広場単体をみるのではなく、広場と街の関係性にも着目して広場を評価し、戦略的に空間を創出・改善していくことが必要です。
・また、広場の形態だけに注目するのではなく、広場でみられる人々のアクティビティ（活動）に着目し、それらを評価することが、多様性溢れる魅力的な広場空間づくりにつながります。

このマニュアルの構成

① 広場の理解の仕方（類型化と方向性）・・・・・・・P.04

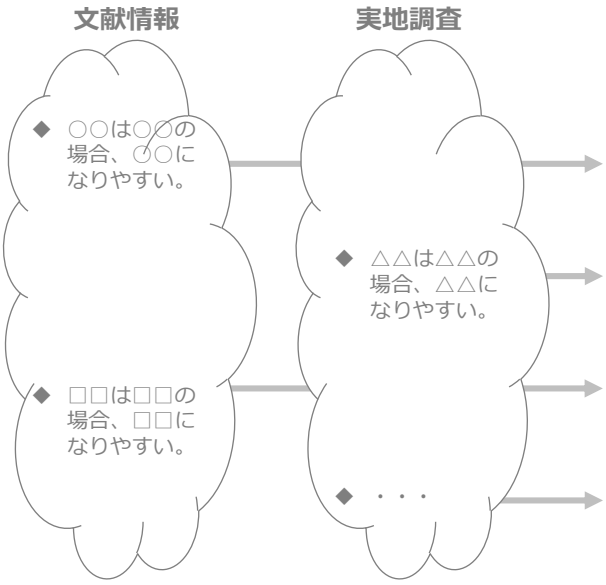
② 広場レイアウトのポイント　・・・・・・・・・・・ P.12
（文献および実地調査からの知見）

③ 広場の評価について　・・・・・・・・・・・・・・P.24

④ 広場の計画・整備・運営について　・・・・・・・P.28

ポイントの裏付け

・広場レイアウトのポイントは、文献情報、実地調査結果を基に整理されています。



①広場の理解の仕方（類型化）

1）広場の立地特性（位置・接続状況）について理解します。

位置	接続状況
中心エリア／周縁部	複数交差／一本

2）広場の空間特性（囲み度・アクティブ度）について理解します。

囲み度	アクティブ度（周辺建物）
かこまれ／さらされ	店舗等が多い／少ない

3）類型ごとの広場特性を踏まえて「目指す方向性」を設定します。

②広場レイアウトのポイント

・目指す方向性に応じた広場レイアウトのポイントを理解します。

○○のためには→ ・**○○の方が好ましいと考えられる。**			
	△△のためには→ ・**△△の方が好ましいと考えられる。**		
	□□のためには→ ・**□□の方が好ましいと考えられる。**		
○・・・			

③ 広場の評価について

・観察的手法による調査データなどを活用して、広場空間を評価し、客観的に広場の利用状況を理解します。

④ 広場の計画・整備・運営について

・広場レイアウト以外の観点として、広場の計画・整備・運営に関する留意点を概観します。

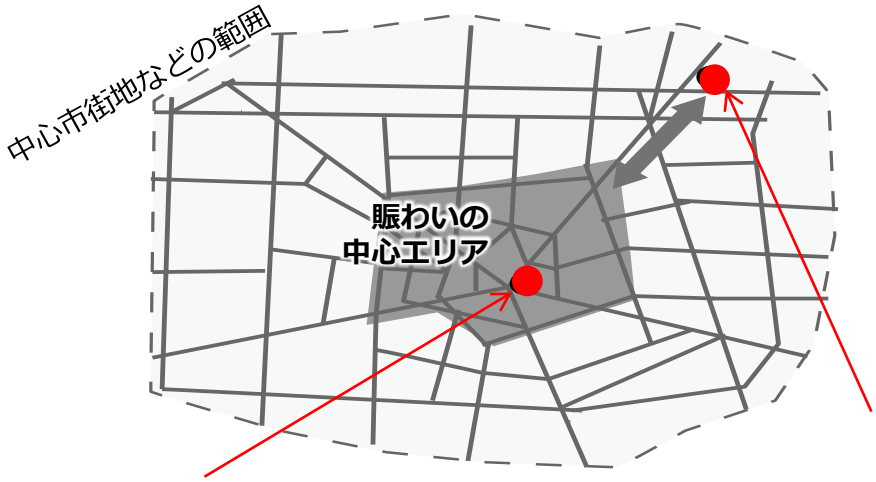
まずは、
広場のタイプ
を理解しましょう。

① 広場の理解の仕方（類型化と方向性）

- 広場には、立地や空間からみて様々なタイプがあり、それぞれのタイプごとに留意すべき・目指すべき方向性は異なるはずです。
- したがって本マニュアルでは、まず、立地特性や空間特性から広場のタイプ分類を行います。
- 各タイプ分類の特性を理解したうえで、広場づくりの留意点・目指すべき方向性を考えていきましょう。

「立地特性： ①位置」

その広場は、街のなかでどのような位置にあるでしょうか？（広場予定地を含みます）



中心エリア（インナー）

多くの歩行者が回遊し、街の中心として認識される賑わいの中心エリア。

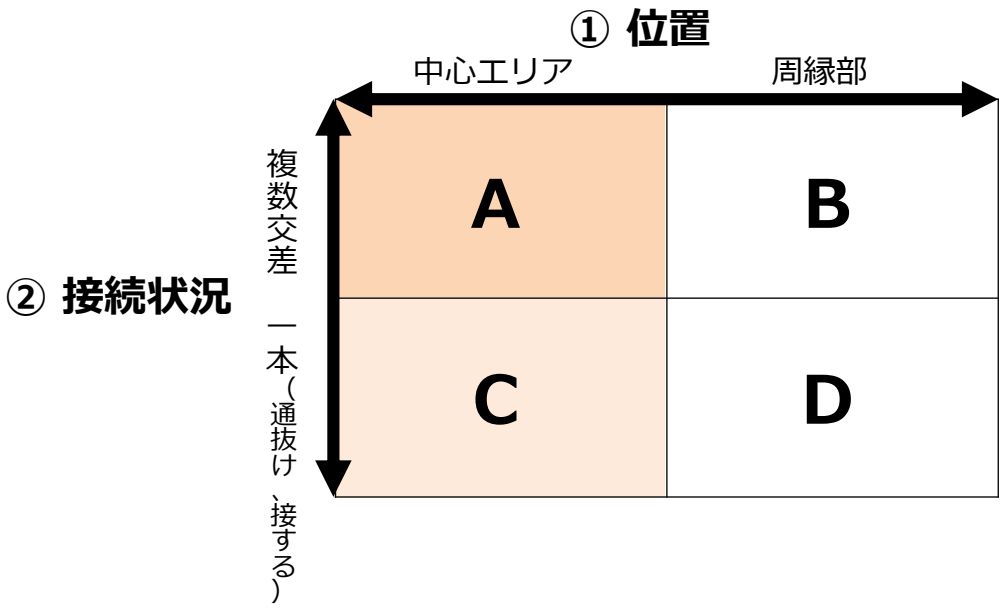
例えば、大規模ターミナルとなる駅の前、商店街の中心、街の中心的な商業施設の前など

周縁部（アウター）

中心エリアからは離れているものの、その有効活用が望まれる公共空間。

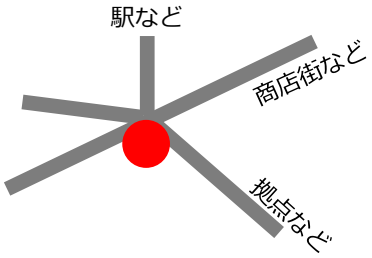
例えば、小さな駅の前、商店街の端、駅から少し離れた公共施設の前など、回遊性を広げたいと思えるような場所。

立地特性



「立地特性： ②接続状況」

その広場は、周辺の施設や街路にどのように接続しているでしょうか？



複数交差（クロス）

交通結節点や拠点施設、商店街などと接続し、複数の流れが交差する立地。エリアの歩行者動線の焦点や結節点。

例えば、複数の街路が交差する地点、複数の方向から人が集まる駅前など

一本（シングル）

商店街など単一の人の流れと関係する立地。敷地に１方向の動線のみが接続する状況。

例えば、街なかの細街路の途中や、その他、商店街の中間地点、大きい施設の中など

各類型の性質と空間づくりの方向性の例

・広場は周辺施設と豊かな関係性を築くことによって、さまざまなアクティビティ（活動）が生まれやすくなります。下記に示すような、立地特性に応じた利用の傾向を踏まえて、広場の方向性を検討しましょう。

A：様々な人が集まりやすく、移動空間と滞留空間が混在しやすい。
→より多くの歩行者を受け入れ、豊かな歩行体験ができる広場。または、多くの人がゆっくりと滞在したくなる広場などの方向性が考えられます。

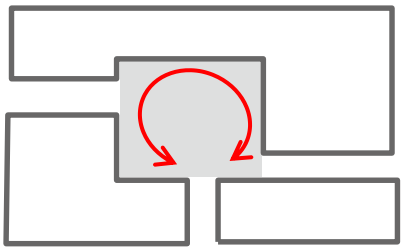
B：地域の人が集まりやすく、滞留空間と移動空間が混在しやすい。
→魅力を高めることによって街の新たな中心的な場所となりうる広場。または、地域の子供や大人が集まって談笑できる広場などの方向性が考えられます。

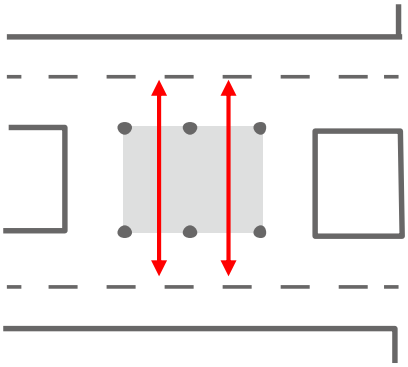
C：広場内の通り抜けが少なく、滞留空間と移動空間が分離しやすい。
→街なかで歩き疲れた時に、街の様子を眺めながらちょっとした休憩ができる広場。または、街なかでも静かにゆっくり休憩できる広場などの方向性が考えられます。

D：広場周辺の人通りが少なく、人の少ない静かな空間になりやすい。
→散歩の途中に景色を眺めながらちょっとした休憩ができる広場。または、近所の子供や高齢者がゆっくりと１日中、趣味の活動を行える広場などの方向性が考えられます。

「空間特性： ③敷地境界部の囲み度」

建物の壁などの立体的なオブジェクトにどのように囲まれているでしょうか？





閉＝かこまれ（クローズ）

広場境界部が主に建物等に面しており、強い領域性が感じられる状況。

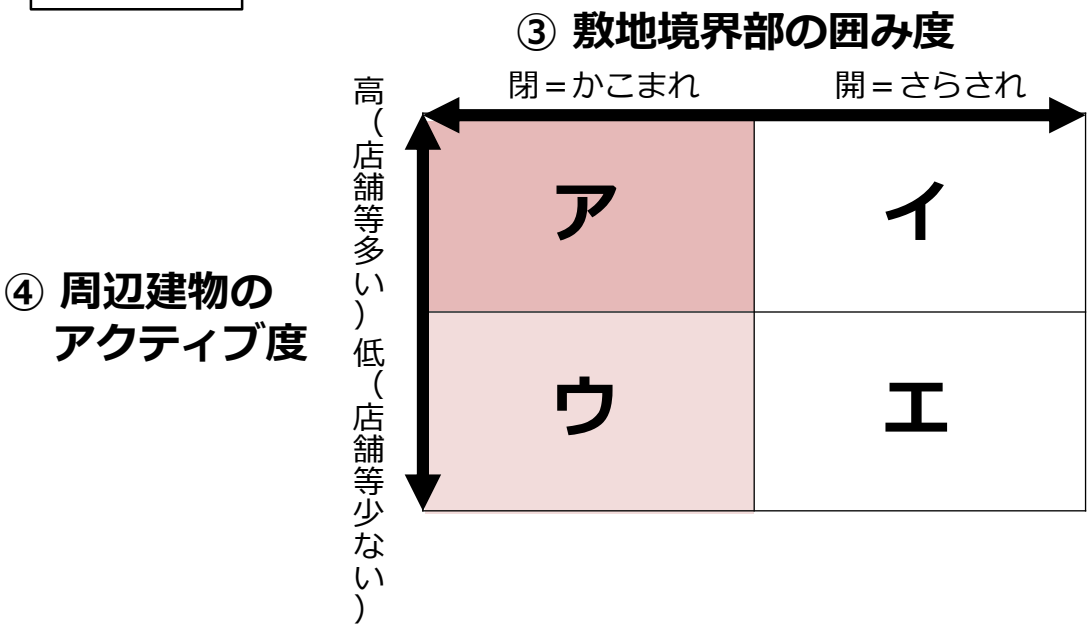
例えば、商店街にある広場、施設内の中庭的区間にある広場など

開＝さらされ（オープン）

広場境界部の大半が道路や空地などとなっており、オープンな状況。

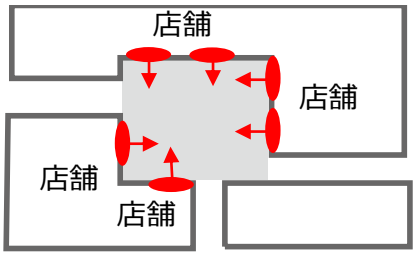
例えば、駅前の道路に囲まれた広場、交差点の脇にある道路に囲まれた広場など

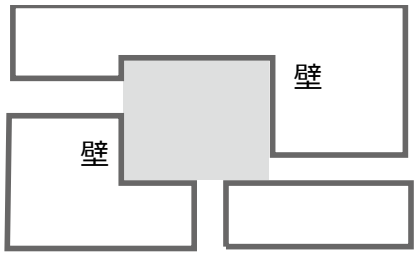
空間特性



「空間特性： ④周辺建物のアクティブ度」

広場に面した店舗等のアクティブな機能が配置されているでしょうか？





店舗等が多い（アクティブ）

広場に沿って店舗が立地しており、
その雰囲気がにじみ出ている状況。

例えば、商店街の店舗に面した広場、
商業施設内の店舗に面した広場など

店舗等が少ない（ブランク）

広場沿いに店舗等はほとんどなく、
壁が大部分を占めている状況。

例えば、店舗を持たない公共施設の
脇にある広場、業務ビルに囲まれた
広場など

各類型の性質と空間づくりの方向性の例

・広場空間の居心地の良さや歩行体験は、空間特性の影響を強く受けます。下記に示す、空間特性に応じた利用者行動の傾向を踏まえて、広場の方向性を検討しましょう。

ア：領域性が高く、周辺店舗の利用客が留まりやすい。
→領域性の高さを生かした居心地の良い空間整備を、周辺店舗と一体的な空間となるよう行うことなどが考えられます。

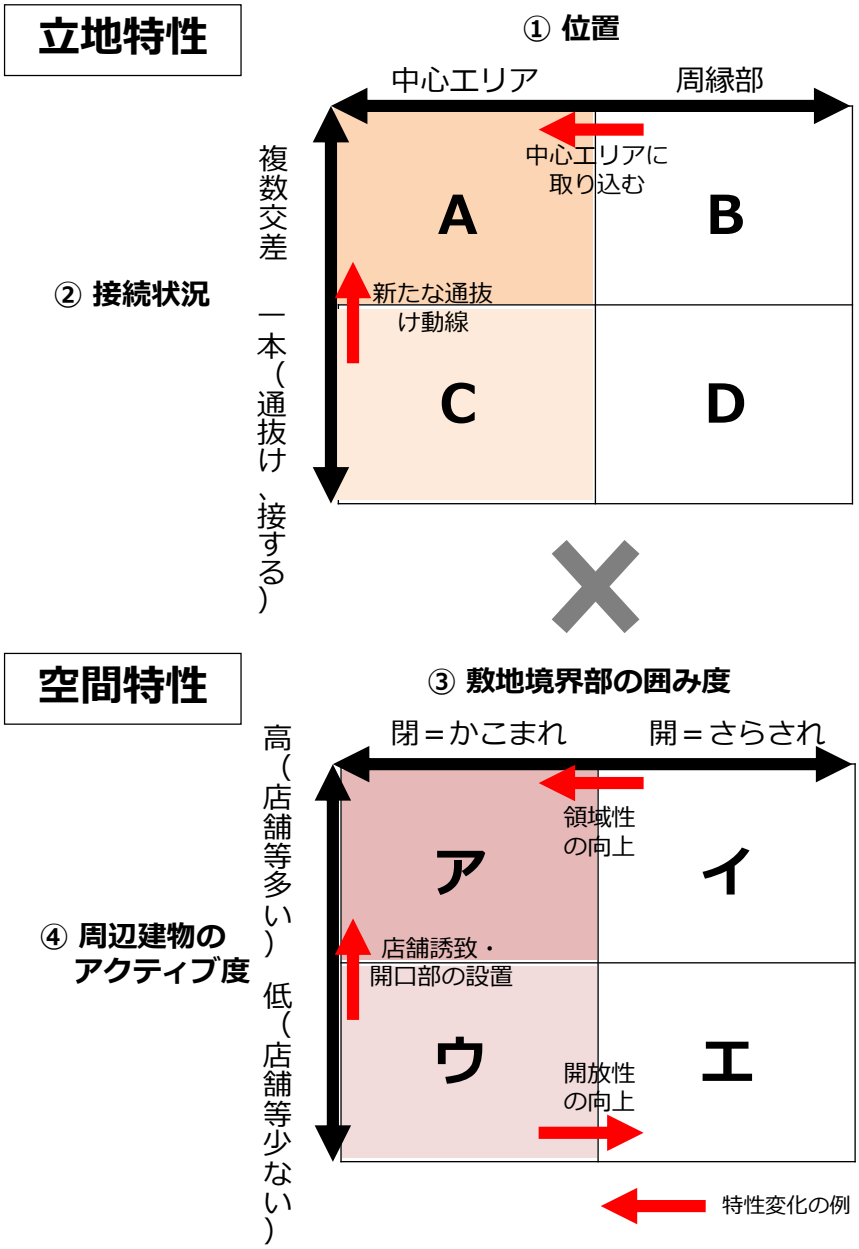
イ：広場周辺の視認性が高く、周辺店舗へ利用客が集まりやすい。
→視界の広がりを生かした開放感のある空間整備を、周辺店舗と一体的な空間となるよう行うことなどが考えられます。

ウ：領域性が高く、ゆっくりできる静かな空間になりやすい。
→領域性の高さを活かして、長時間行うアクティビティが生まれやすい空間整備を行うことなどが考えられます。

エ：広場周辺の視認性が高く、開放的な空間になりやすい。
→開放感のある空間特性を活かして、様々なアクティビティが生まれやすい空間整備を行うことなどが考えられます。

「立地特性」×「空間特性」の組合せと空間づくりの方向性の例

- 立地特性と空間特性を組み合わせて、広場の持つ特性をより具体的に考えることは、広場の現状を理解し、方向性を考える手助けとなります。
- また、目指すべき広場の姿は、現在のおかれた状況だけで考えるのではなく、将来の狙う方向性など各特性を変化させることも含めて考えましょう。
- ここでは、代表的な２つのタイプについて、その特性と空間づくりの方向性の例を紹介します。



各タイプの具体事例

立地特性	空間特性	広場の例
A	ア	丸亀町グリーンけやき広場（高松市）
	イ	北条ポケットパーク（小田原市）
	ウ	三軒寺前広場（伊丹市）
	エ	
B	ア	
	イ	
	ウ	
	エ	金沢21世紀美術館の広場（金沢市）
C	ア	パサージュ広場（青森市）
	イ	すわろうテラス（札幌市）
	ウ	柿木畠ポケットパーク（金沢市）
	エ	
D	ア	開港広場北広場（横浜市）
	イ	
	ウ	ペイリーパーク（ニューヨーク）
	エ	臨港パーク（横浜市）

各タイプの方向性の例

A・イ タイプ　（中心エリア／複数交差）×（さらされ／店舗多）

立地・空間の特性

市街地の中心の重要な交差点であり、多くの歩行者が通り抜ける場所となっている。周囲には多くの店舗があるものの、広場の周囲を道路が取囲んでおり領域性が弱い。

関係する視点

- 買物などの途中に短時間の滞留が便利に、快適にできるか？
- 来街者、市民、周辺店舗のスタッフなどの相互作用が見られるかどうか？

空間づくりの方向性（例）

- さらさていることを活かした、柔軟な可変性・可能性を確保する。
- シンプルで便利な主動線を確保しつつ、短時間滞留を促す。
- 周辺店舗と広場との関係をつくる。

広場の立地

広場周辺の建物用途

R　物販店舗
CA　飲食店舗
S　サービス店舗
OF　オフィス
RE　住宅
P　駐車場
VA　空家など

D・ア タイプ　（周縁部／一本）×（かこまれ／店舗多）

立地・空間の特性

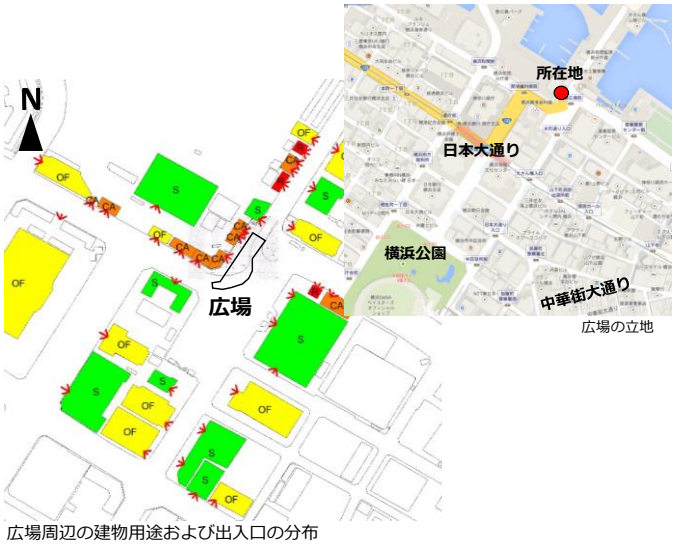
臨海部近くで周辺にはオフィスが多い、観光エリアでもある。多くの歩行者が通り抜ける場所となっている。周囲には多くの飲食店舗があり、領域性も強い。

関係する視点

- 主動線と滞留空間が干渉しやすいため、お互いの妨げとならないように工夫がされているか？
- 来街者、市民、周辺店舗のスタッフなどの相互作用が見られるかどうか？

空間づくりの方向性（例）

- 空間の中に、干渉をやわらげ拠り所となる背面を設ける。
- 居心地の良い滞留空間にするため、歩行者を眺められるように滞留空間を配置する。
- 店舗と広場の関係を高める工夫をする。



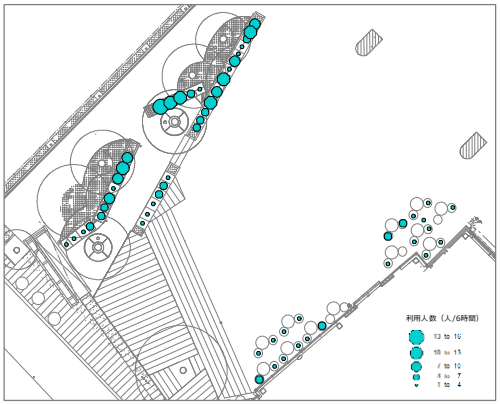
広場の立地

広場周辺の建物用途および出入口の分布

R　物販店舗
CA　飲食店舗
S　サービス店舗
OF　オフィス
RE　住宅
P　駐車場
VA　空家など

観察的手法による情報収集の例

- 広場での多様な活動を把握するための代表的な観察的手法をご紹介します。本手法は統計的な結論を得るためではなく、広場で発生する様々な現象を詳細に捉え、それらをわかりやすく可視化することを主な目的とします。



スタティック・ログ：滞留行動の定点観測調査

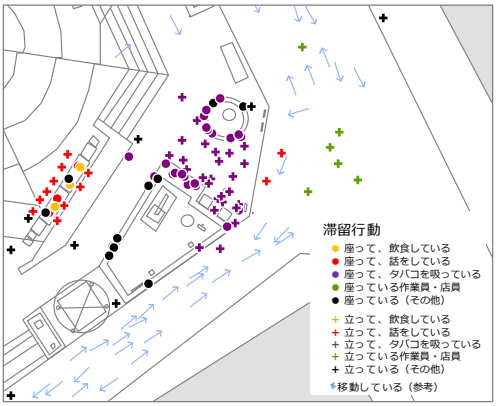
広場内で見られる滞留行動の発生状況・行動の様子を、継続的に観察・記録し、一定時間内の滞留者数、滞留時間や活動の発生量を明らかにします。

◆ **行動の多様性に関して**
・長時間滞留している人はどういった活動をしているか？

◆ **利用者の多様性に関して**
・時間帯に応じて利用者の属性はどのように変化するか？

◆ **利用者数に関して**
・広場内ではどの場所(座席)の利用が多いか？少ないか？

◆ **周辺との関係に関して**
・近隣の店舗で買ったものを広場で飲食・利用しているか？



スナップショット：滞留者分布の観察調査

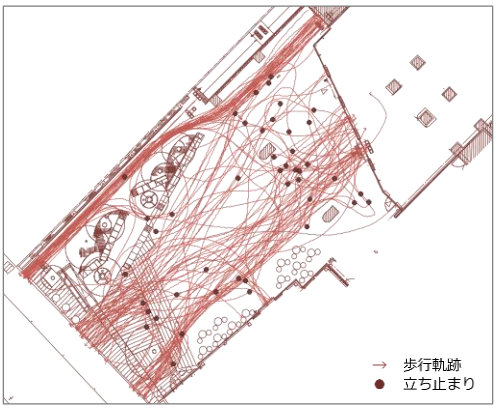
どの場所で、どんな属性の人が、どんな行動をしているのか、瞬間的な滞留行動の分布状況を図面上に詳細に記録します。

◆ **行動の多様性に関して**
・どんな行動が広場内のどこで起こっているか？

◆ **利用者の多様性に関して**
・子供から高齢者まで多様な年齢の人が訪れているか？

◆ **利用者数に関して**
・広場の大きさに対して、十分な人が訪れているか？

◆ **周辺との関係に関して**
・近隣の店舗と連携した使われ方をしているか？



トレース：移動軌跡の観察調査

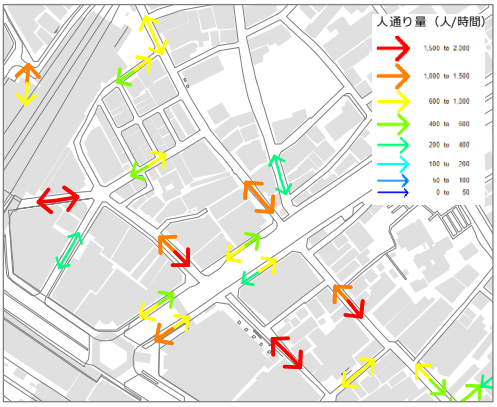
広場内や街なかでの歩行者行動の観察調査を行うことにより、歩行者の歩行軌跡・立ち止まり行動を記録します。

※被観察者から離れた場所で立ち止まって記録するなど周囲に迷惑がかからないよう配慮しましょう。

◆ **行動の多様性に関して**
・広場を通過する人は、広場内の景色・店舗を楽しんでいるか？

◆ **利用者数に関して**
・広場の動線と滞留空間の位置関係は適切か？利用しやすいか？

◆ **周辺との関係に関して**
・広場利用後に周辺店舗に立ち寄っているか？



ゲートカウント：歩行者通行量のサンプリング調査

数分間のサンプリング的な人通り量のカウントによって、街なかの多地点において人通り量のデータを収集し、局所的な歩行者の粗密を可視化します。

◆ **利用者数に関して**
・広場周辺にはどれほどの人通りがあるか？

◆ **利用者の多様性に関して**
・広場周辺にはどういった属性(年齢・性別)の人が多いか？

◆ **周辺との関係に関して**
・広場周辺は他のエリアと比較して人踊りが多いエリアか？

次に、広場の方向性に応じた
レイアウトのポイント
を押さえましょう。

② 広場レイアウトのポイント

（文献および実地調査からの知見）

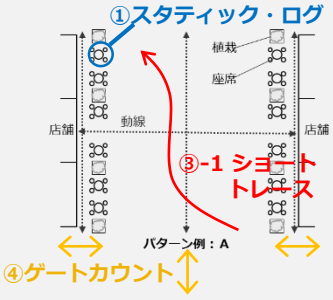
富山グランドプラザ　実地調査の概要

期　　間：平成27年10月15日（木）～平成27年10月21日（水）
（うち平日の日中6時間×5日間・5パターン）

場　　所：富山県富山市総曲輪三丁目8番39号「富山グランドプラザ」

実験内容：広場内の座席、植栽の配置パターンを変更させることによる、広場利用者の利用（滞留・歩行）状況の変化を確認

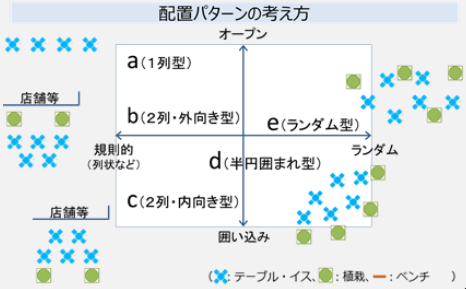
調査手法※：①スタティック・ログ（滞留行動の定点観測調査）
③-1 ショートトレース（広場内の移動軌跡の観察調査）
④ゲートカウント（周辺歩行者通行量のサンプリング調査）



調査結果（概要）

滞留者の観測数：
滞留者 約2,300人
（5日間・各日6時間（計30時間）の滞留者数）

移動軌跡の観測数：
約910サンプル（組）



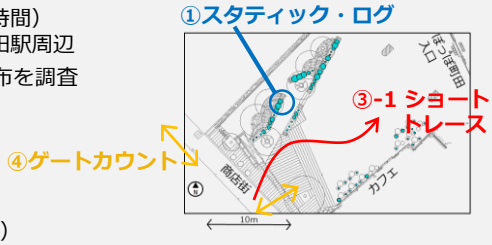
ぽっぽ町田／町田駅周辺エリア　実地調査の概要

期　　間：平成28年11月22日（火）、23日（水(祝日)）　（日中6時間）

場　　所：東京都町田市原町田４丁目10番20号「ぽっぽ町田」、町田駅周辺

調査内容：広場内の調査に加え、周辺エリアの施設立地や歩行者分布を調査し、広場の利用状況・立地特性を確認

調査手法※：①スタティック・ログ（滞留行動の定点観測調査）
②スナップショット（街なかの滞留者分布の観察調査）
③-1 ショートトレース（広場内の移動軌跡の観察調査）
③-2 ロングトレース（街なかの移動軌跡の観察調査）
④ゲートカウント（周辺歩行者通行量のサンプリング調査）
⑤店舗立地状況調査



調査結果（概要）

滞留者の観測数：
滞留者 約620人
（2日間・各日6時間（計12時間）の滞留者数）

広場の移動軌跡の観測数：
約270サンプル（組）

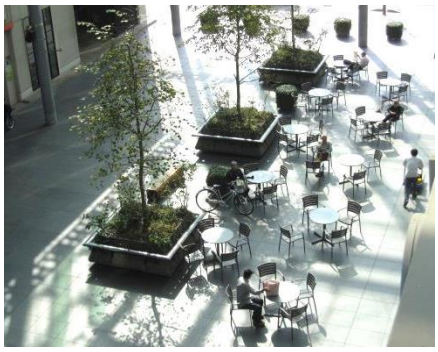
街なかの移動軌跡の観測数：
約60サンプル（組）

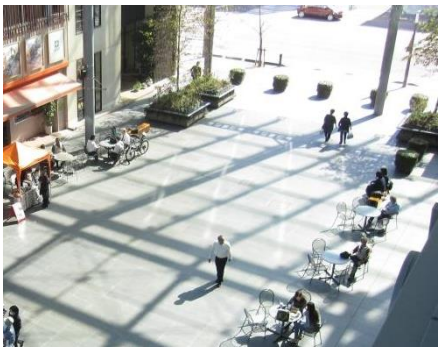
※詳しい調査手法についてＰ11で解説しています。

広場レイアウトのポイント（例示１）

滞留空間の居心地のよさは、壁や植栽による領域性から。

- 壁や植栽により囲まれた空間をつくることにより、空間の領域性を高めることができます。質が高く領域性の高い空間は居心地の良い空間になる可能性があります。
- 領域性の低い空間は、滞留空間として認識されにくく、座席近くを通り抜けるような行動が発生しやすいです。
- 利用者に長居してほしい場合は、領域性を高めることが考えられますが、多くの人がスムーズに移動できる歩行空間としての機能を重視する場合は、あえて領域性を弱めることも考えられます。


植栽により囲まれた空間（富山ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾌﾟﾗｻﾞ）


さらされた空間（富山ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾌﾟﾗｻﾞ）

さらされた広場（北条ポケットパーク）

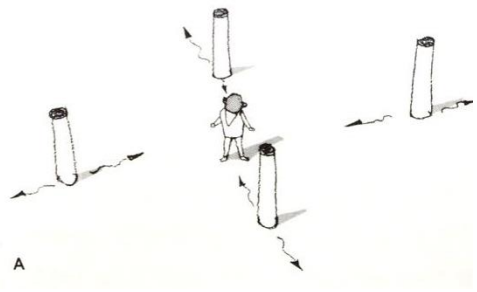
文献紹介：外部空間の設計（著者：芦原義信、出版年：昭和50年）

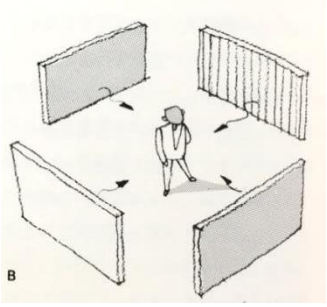
○空間の閉鎖性

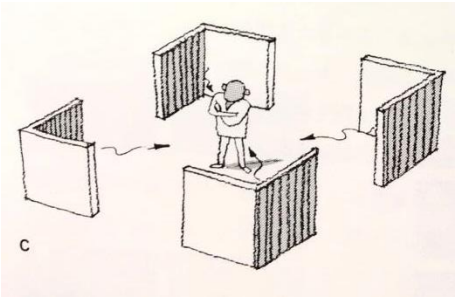
「外部空間の間取りをするに当たって、おのおのの空間にある程度の閉鎖性をあたえて、求心的に空間の秩序をととのえてゆくという方法がある。そのためには、壁の配置や、そのあり方に留意する必要がある。」

「Ｂ図のように、各辺に4枚の壁をたてると…Ａよりはるかに閉鎖性のある空間が成立するが、隅が空間的に欠けていてしまりがない。 …
Ｃ図のように、4枚の折れ曲がった壁をたてると、壁の全面積がＢと同じであっても、はるかに空間の閉鎖性がよくなって、空間のしまりと緊張感がでてくる。」

（書籍 P.９６）







各類型との関係

- 「D（周縁部／一本）」の場合は、居心地の良さを広場の魅力要素とすることが大切です。
- 「ア・ウ（かこまれ）」の場合は、周辺建物を活かして、座席を配置することが大切です。
- 「イ・エ（さらされ）」の場合は、領域性の高い居心地の良い滞留空間をつくるには、高木の植栽などを活用することが考えられます。

実地調査からの知見

カテゴリー

領域性との関係

知見

テーブルや植栽などの配置の仕方に応じて、テーブルを利用する人の数が変化する

分析指標

利用者数

※**利用者数**：
１日の調査時間(6時間)内にテーブルを利用した人数の集計値。

テーブル・イスの配置が
ａ１列型（**列状さらされ型**）
ｂ２列外向き型（**店舗前ｵｰﾌﾟﾝ型**）
ｃ２列内向き型（**店舗前囲まれ型**）
の３つの場合で**利用者数**を比較。

ｃが利用者数が最も多い。
ｂが利用者数が最も少ない。
→ **領域性が高い**ほど、**多くの滞留行動**が観察された。
aの利用者数からは**アクセス性**も関係しうることが示唆される。

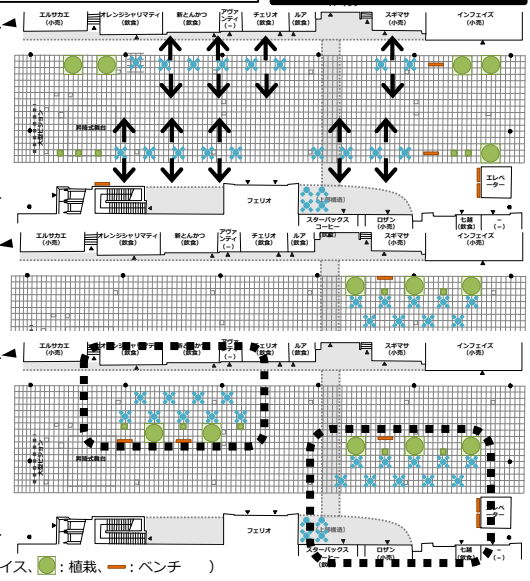
ａ １列型(ﾃｰﾌﾞﾙ･ﾍﾞﾝﾁ数：30)
滞留者数 延べ約**485**人

テーブル当たり利用者数
約**16.2**人

ｂ 2列･外向き型 (同：32)
滞留者数 延べ約**462**人
テーブル当たり利用者数
約**14.4**人

ｃ 2列･内向き型 (同：33)
滞留者数 延べ約**568**人

テーブル当たり利用者数
約**17.2**人



（：テーブル・イス、：植栽、：ベンチ　）

カテゴリー

領域性との関係

知見

テーブルや植栽などの配置の仕方に応じて、テーブル間を通り抜ける人の割合が変化する

分析指標

通り抜け率

※**通り抜け率**：
トレース調査で観測された全観測数に対する、座席間の通り抜け数の割合。

ａ（さらされ型）とｃ（かこまれ型）の２つの場合で、通り抜け率を比較。

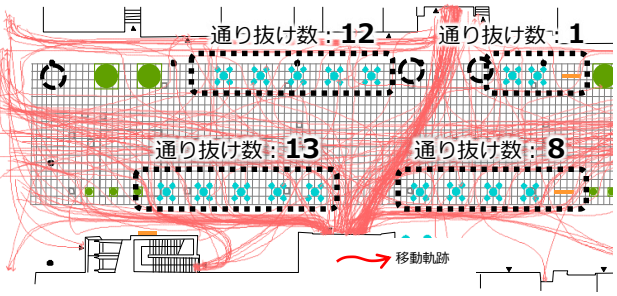
ａ（さらされ型）の方が、通り抜け率が高い。
→ **領域性が高い**ほど、**通り抜ける人の割合が低い**ことが観察された。

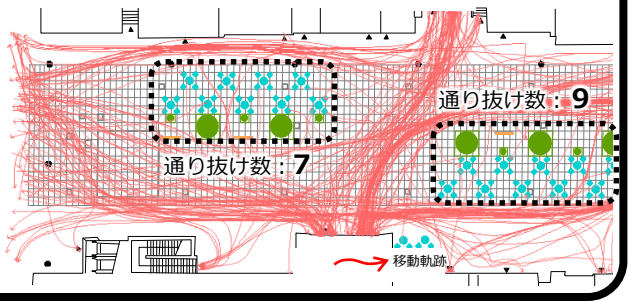
ａ １列型
総観測数：180人

広場通行者の**19%**
が座席間を通り抜け

ｃ 2列･内向き型
総観測数：228人

広場通行者の **7%**
が座席間を通り抜け





広場レイアウトのポイント（例示２）

座席の場所ごとに利用特性が異なる。飲食店舗近く？出入口近く？

- 広場内のどこに座席を配置するかによって、座席の利用特性は変化します。好まれる場所の基本条件は、「①よい眺めがあること」、「②快適な気候を備えていること」、「③背後を壁などに守られていること」などです。
- 広場周りの飲食店舗近くの座席はより多く利用される傾向にあり、広場と周辺店舗との関係性を高める効果が期待できます。
- また、広場出入口近くの座席は、荷物の整理やちょっとした休憩など、短時間利用に活用されやすいです。

植栽を背に歩行者を眺められるベンチ
(グリーンけやき広場)

飲食店舗近くの座席（富山ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾌﾟﾗｻﾞ）

広場出入口近くの座席（富山ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾌﾟﾗｻﾞ）

文献紹介

人間の街：公共空間のデザイン
（著者：ヤン ゲール、翻訳：北原 理雄、
出版年：平成26年、原著：平成22年）

○座るのに適した場所

「座るのに適した場所の一般的条件は、快適な局所気候を備えていること、背後を保護されたエッジに位置していること、よい眺めがあること、騒音が少なく会話が可能なこと、空気が汚れていないことであった。なかでも眺望が特に重視されていた。水、木立、花、美しい空間、立派な建築、芸術作品など、特別な魅力を備えた場所では、誰もがそれらがよく見えることを望んでいた。それと同時に、人びとはその場にいる他の人たちとそのアクティビティを見たいと望んでいた。魅力的な眺望が場所の吸引力を高めることは言うまでもないが、人びとと街のアクティビティの眺めはそれ以上に大きな魅力である。局所気候、配置、保護、眺望の4条件がそろえば、座るのに理想的な場所になる。」

（原著 P.140）

公共空間の活用と賑わいまちづくり
（著者：篠原修、加藤 源、北原 理雄、
都市づくりパブリックデザインセンター 、出版年：平成19年）

○憩いの場の創出

「ただ通行する場所という色彩の強かった公共空間において、オープンカフェ（これに伴って設置されるイスやテーブル等の休憩施設）は新たな休憩の場となる。これは、高齢者や子供連れなどがすごしやすい都市空間形成につながる。」

（書籍 P.47）

各類型との関係

- 「A（中心エリア／複数交差）」の場合は、主動線を確保した上で、滞留空間を配置することが大切です。
- 「ア・イ（店舗多い）」の場合は、周辺店舗との相乗効果を期待できる配置も考えられます。
- 「ア・ウ（かこまれ）」の場合は、壁や植栽などの空間の縁（エッジ）を活かした配置が大切です。

実地調査からの知見

カテゴリー

アクティビティとの関係

知見

テイクアウト可能な飲食店舗からの距離に応じて、テーブルの利用度合が変化する

分析指標

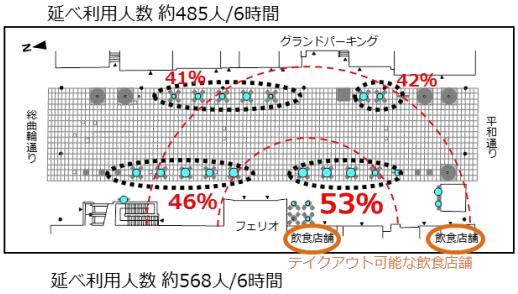
平均テーブル利用率

※**平均テーブル利用率**：
ある時刻におけるエリア内の全テーブル数に対する利用中テーブルの割合の、調査時間帯での平均値。(テーブル周りのイスに１人でも利用者がいた場合、そのテーブルを利用中として算入)

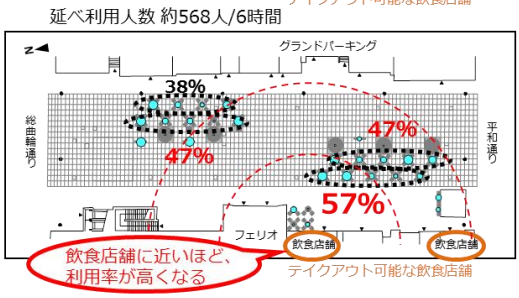
テイクアウト可能な飲食店舗から近いか、遠いかで、エリア毎の平均テーブル利用率を比較

テイクアウト可能な飲食店舗に近いほど、
・テーブル利用率が高い。
・滞留時間は長い。
→ テイクアウト可能な飲食店舗の近くは、飲食などをしながら、ゆっくりと滞留する場所となっている。

テーブル利用率（調査日1）



テーブル利用率（調査日2）



「テイクアウト可能な飲食店舗からの距離」と「テーブル利用率」との関係

カテゴリー

出入口との関係

知見

広場出入口からの距離に応じて、利用のされ方が変化する

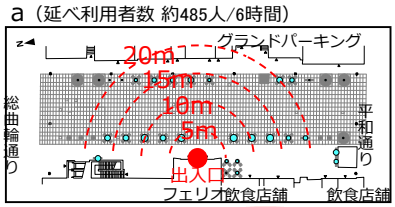
分析指標

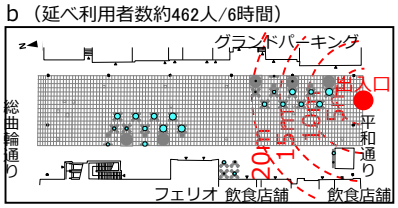
利用者数
平均滞留時間

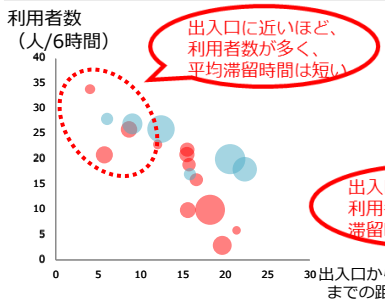
広場出入口からテーブルまでの距離と、利用者数および滞留時間を比較。

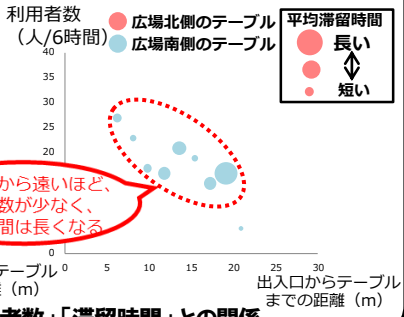
出入口に近いほど、
・利用者数が多い。
・一人あたりの滞留時間は短い。
→ 出入口近くでは、買った荷物の整理等、短時間・多頻度の利用が多い。

※メインの広場出入口は、各広場出入口の中で最も人通りの多い出入口を設定。









「出入口からの距離」と「テーブル利用者数」「滞留時間」との関係

広場レイアウトのポイント（例示３）

座席のタイプごとに利用特性が異なる。椅子もベンチも適材適所に。

- 座席の形態に応じて座席の利用特性は異なるため、期待するアクティビティを想定し、アクティビティに適したタイプの座席を配置することが大切です。
- 幅広い層の利用者や、多様なアクティビティを受け入れるためには、可動性の椅子や、複数のコーナーを持つ座席など、柔軟な形態の座席タイプを選択する必要があります。

1人用の座席（柿木畠ポケットパーク）

円弧形のベンチ（壱番街ドーム広場）

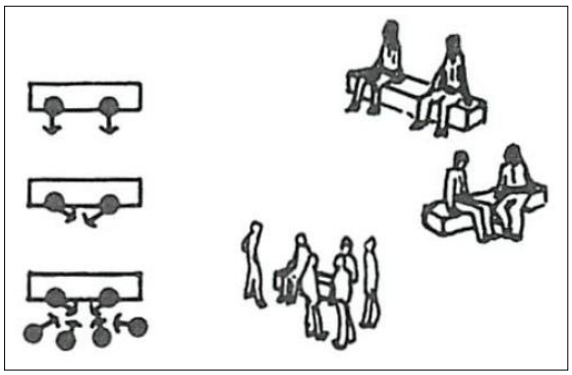
可動式の椅子(ニューヨーク)

文献紹介　感応する環境(RESPONSIVE ENVIRONMENTS)

（著者：イアン ベントレイ、パウル ミューラン、スー マッグリン、グラハム スミス、アラン アルコック
翻訳：佐藤 圭二、出版年：平成23年、原著：昭和60年）

○座席の形態：まっすぐな平板

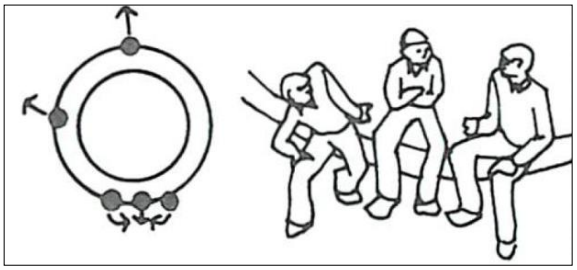
「集団でなく一人のためのもので、前の出来事を直接観察する。…グループの相互交流のためには不都合。」



（原著 P.73）

○座席の形態：円

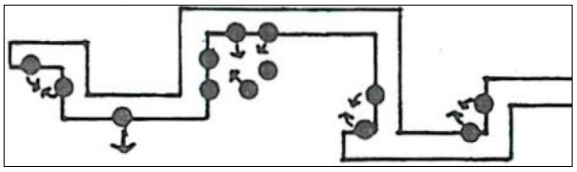
「集団でない個人が複数いる時によい。…グループの相互交流のためには真っ直ぐな平板同様に不都合。」



（原著 P.73）

○座席の形態：多数のｺｰﾅｰをもつﾕﾆｯﾄ

「いろいろな要求を受け入れる。…ユーザーを互いにわずかに斜めに座らせて、向きを変えることを助ける。」



（原著 P.73）

各類型との関係

- 「A（中心エリア／複数交差）」の場合は、様々なアクティビティを受け入れられる柔軟な座席タイプを選択することが大切です。
- 「D（周縁部／一本）」の場合は、個人が居心地よく利用できる座席を十分に配置することも大切です。
- 「ア・イ（店舗多い）」の場合は、個人での飲食、グループでの飲食など、様々な要求を受け入れられる座席タイプを選択することも考えられます。

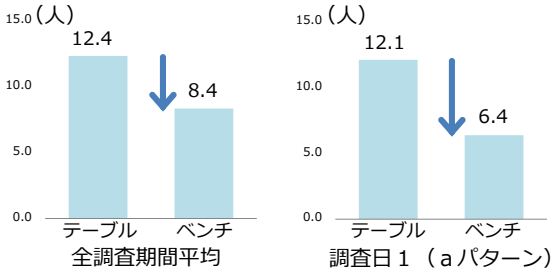
実地調査からの知見

カテゴリー	知見	分析指標
空間要素の性質	**テーブル席とベンチとでは、1利用あたりの滞留時間や使われ方が異なる。**	**滞留時間**

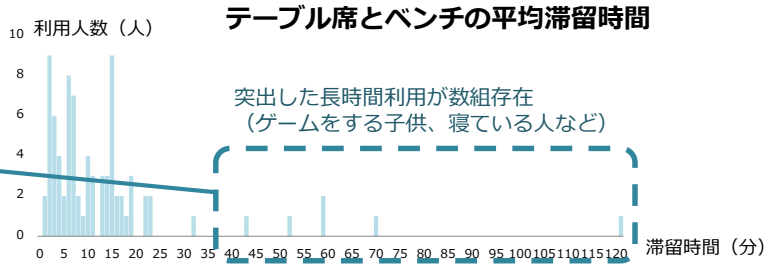
テーブル席とベンチ利用の平均滞留時間（1利用あたりの滞留時間）を比較。

テーブル席よりベンチ席の方が短時間利用されやすい傾向にある。

ただし、配置のされ方によっては、ベンチにおいて長時間の利用（アクティビティ）が見られた。



テーブル席とベンチの平均滞留時間



ベンチの滞留時間別の利用人数分布（調査日２（ｄパターン））

◆ 様々な滞留活動の例

複数人でテーブルを囲って会話

ベンチの周りで遊ぶ子供たち

テーブルで食事をしながら読書

ベンチで居眠り

広場レイアウトのポイント（例示４）

空席の多い空間は寂しい印象を与える。座席の数・デザインは適切に。

- 空席が目立つ空間は、寂しい印象を来街者に与えるため、１つのテーブルに対する座席数や座席のデザインには留意する必要があります。
- 例えば、４人掛けのテーブルセットを１人で利用している場合、残りの３席は選択されにくく、空席として残りやすいです。多様な人数のグループを受け入れるためには、様々な人数がほどよく利用できる柔軟性の高い座席タイプを選択する必要があります。
- ちょっとした段差や階段などを補助席として活用できるよう、さりげなく滞留空間を提供することも一つの工夫になります。

可動式の小さなテーブル・イスの利用(ニューヨーク)

段差を利用した多様な座席(キャッスルガーデン)

植栽を利用した座席（富山ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾌﾟﾗｻﾞ）

文献紹介

人間の街：公共空間のデザイン
（著者：ヤン ゲール、翻訳：北原 理雄、
出版年：平成26年、原著：平成22年）

○基本席と補助席

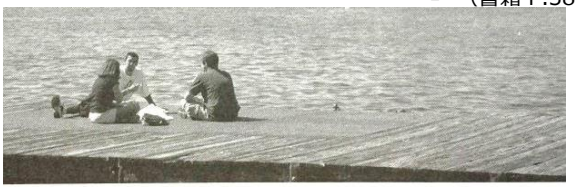
「街に快適で多様な座る場所を用意するには、基本席と補助席をうまく組み合わせる必要がある。基本席は背もたれと肘掛けのついた家具であり、ベンチ、独立した椅子、カフェの椅子などがこれに該当する。・・・
多くの場合、適切な場所に置かれた快適な基本席に加えて、十分な補助席を用意しておく必要がある。・・・座る場所としては、基壇、階段、石、車止めの短柱、記念碑、噴水、街の地面そのものなど、実にさまざまなものが利用できる。
補助席の利点は、階段や植木鉢の基壇のように本来の役割を持っていて、必要なときに座る場所に利用できる点である。」

（原著 P.141）

広場のデザイン
（著者：小野寺康、出版年：平成26年）

○座る造形：形の多義性

「椅子やベンチがあれば、そこが座るべき場所であることは誰でもわかる。だからこそ、注意しなくてはならないのはそのニュアンスだ。「ここに座れ」という命令形になっていないか。単目的のベンチを、無造作に置くだけでは、自動的にそういうメッセージなりかねない。そして、その結果できる「場」の意味性は貧しい。…
休みたくなる場所を用意した上で、座るか座らないかの判断を利用者に委ねる空間に仕立てることが重要だ。そして、その委ね方が、デザインというものなのである。
設計者が意図を込めてデザインすれば、必ずしもイスの形をしていなくてもいい。」（書籍 P.38）



各類型との関係

- 「A・C（中心エリア）」の場合は、休日のイベント時に対応できるよう、段差などの座れる場所を十分に確保することが大切です。
- 「B・D（周縁部）」の場合は、過度に座席を設置しすぎないように留意することが大切です。
- 「ア・イ（店舗多い）」の場合は、可動式の椅子を活用するなどし、利用者が自由に数・場所を調整できるようにすることも考えられます。

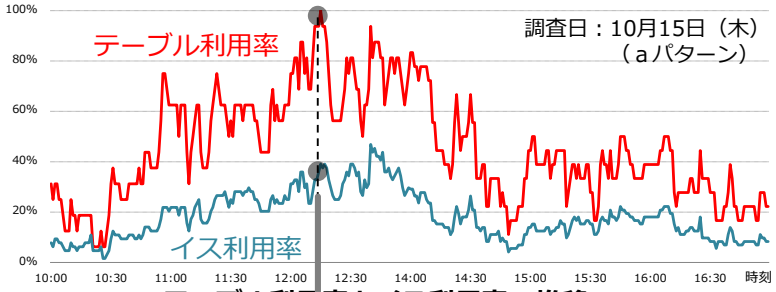
実地調査からの知見

カテゴリー	知見	分析指標
空間要素の性質	**4人掛けのテーブルセットは相席利用されにくく、未利用のイスが発生しやすい。**	**テーブル・イス利用率**

各時間帯のテーブル利用率とイス利用率の推移を比較。

テーブル利用率と比べ、イス利用率は常に低い。
4人掛けのテーブルセットの場合、相席利用がされにくく、未利用のイスが多く発生。

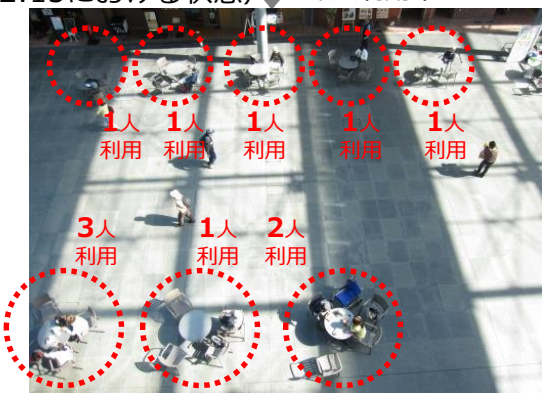
※**テーブル利用率**：各時刻のエリア内の全テーブル数に対する利用中テーブルの割合。
なお、テーブルまわりのイスに一人でも利用者がいた場合、そのテーブルを利用中として計算。
※**イス利用率**：各時刻のエリア内の全イス数に対する利用中イスの割合。



テーブル利用率とイス利用率の推移

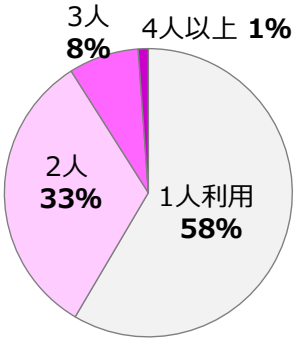
例
（12:15における状態）

テーブル利用率：**100%**
イス利用率　　：**40%**



滞留者の多くは1人利用か２人組であり、平均グループ構成人数は1.6人。

4人掛けテーブルだけでは空き席が発生しやすい状況にある。



グループの構成人数

1人利用　：**58%**
2人　　：**33%**
3人　　：**8%**
4人　以上：**1%**

平均グループ構成人数
1.6人

広場整備による波及効果（例示５）

広場は周辺店舗との相互利用が期待される。回遊行動の活性化に。

- 広場で休憩して疲れを取ることにより、その後の街なかの回遊の活性化が期待できます。
- 居心地の良い魅力的な広場には、飲食・会話などをして楽しく過ごすことを第一目的とした来訪者を集客する効果があると考えられます。
- ただし、広場は周辺店舗との相互利用により賑わいを生み出すことが多く、人通りの少ないエリアにおいて賑わいを生み出すにはイベントの開催などの工夫が必要となります。

広場での休憩の様子（ぽっぽ町田）

昼食を楽しんでいる家族（ぽっぽ町田）

イベントで賑わっている様子（ぽっぽ町田）

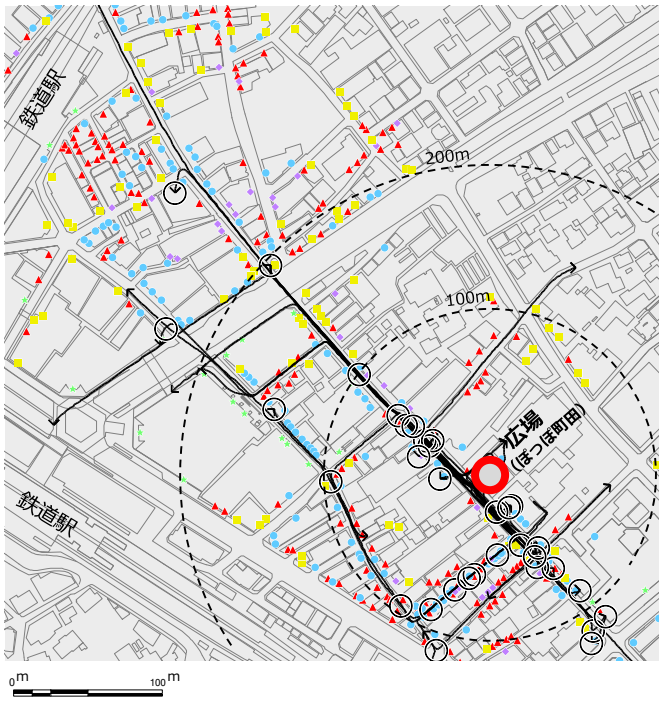
実地調査からの知見

◆ 広場利用と街なかの回遊行動

広場（ぽっぽ町田）周辺には、複数の飲食店舗や物販店舗などが立地しており、多くの広場利用者において、広場利用後には周辺店舗に立ち寄っている様子が確認された。

広場は周辺店舗と相互に利用されることにより、街なかの回遊行動が活発になることが期待される。
→広場整備は、広場単体で考えるのではなく、周辺施設との関わりを考慮して整備することが大切。

店舗出入口分布と広場利用後の歩行行動



歩行行動
→　歩行軌跡
○　店舗立ち寄り

店舗出入口
●　物販
▲　飲食
■　サービス
◆　娯楽
★　ミックス

実地調査からの知見

カテゴリー
波及効果

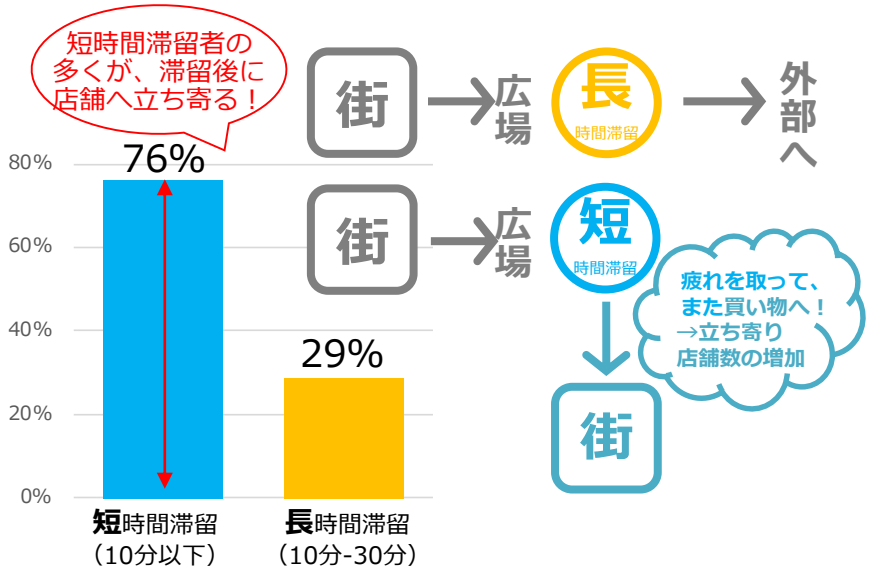
知見
短時間滞留者のほうが、その後に周辺店舗に立ち寄っている

分析指標
店舗立ち寄り率

※**店舗立ち寄り率**：
　ロングトレース調査で観察した全サンプルに対する、周辺店舗立ち寄りを行ったサンプルの割合。

短時間滞留者と長時間滞留者の滞留後の店舗立ち寄り率を比較。

短時間滞留者の約８割は滞留後に周辺の店舗に立ち寄っている。
→ 短時間滞留は、広場そのものの賑わいへの寄与というよりは、周辺店舗との相互利用につながることが期待できる



「滞留後の店舗立ち寄り率」

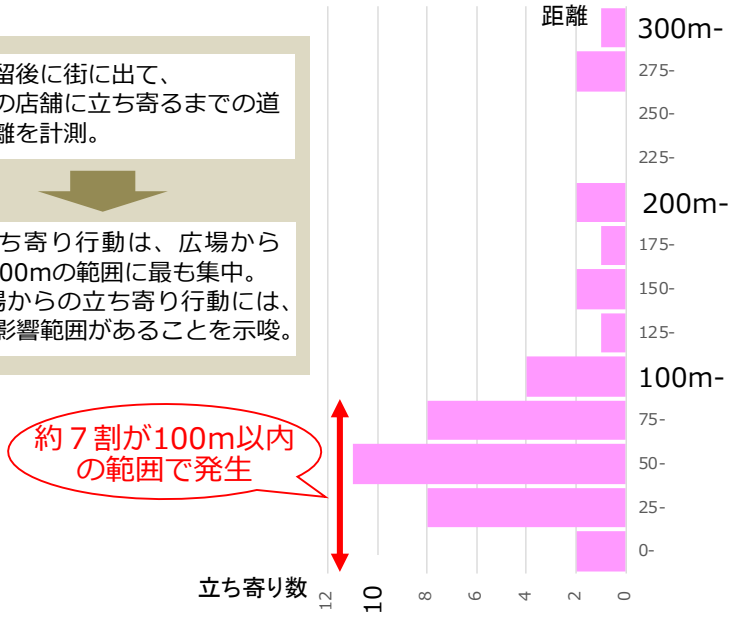
カテゴリー
波及効果

知見
広場利用後の店舗立ち寄りは、広場から一定の範囲内で多く発生する

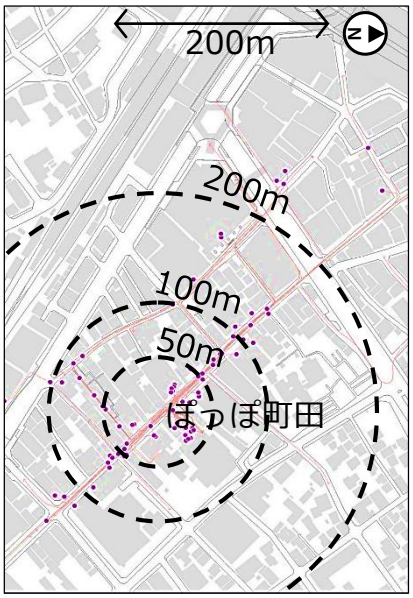
分析指標
立ち寄り店舗までの距離

広場滞留後に街に出て、
１件目の店舗に立ち寄るまでの道のり距離を計測。

店舗立ち寄り行動は、広場から25m-100mの範囲に最も集中。
→ 広場からの立ち寄り行動には、一定の影響範囲があることを示唆。



広場滞留後の1件目店舗立ち寄りの距離帯別の発生分布



広場滞留後の店舗立ち寄り行動の分布

その他の広場レイアウトのポイント

◆街の回遊の核として広場を活用

商業施設が集まる交差点付近や人々の動線が集まる橋の付近、観光施設の前や駅前など、街における回遊の核、賑わいの核となりうる場所は、どの都市にも何らかの形で存在します。
そういった場所に広場的な空間を確保し、オープンカフェ、パフォーマンスなどの日常的な賑わい活動の場とすることにより、街全体の魅力向上、回遊性の向上など、周辺への波及効果が期待できます。

◆空間の質を高めて賑わいを増加

場の賑わいに影響を与える要素として、大きくは来街者数、滞留時間、活動状況の３つがあります。来街者数を増やすだけでなく、空間の質を高めて、そこで多くの時間を過ごす要求を高めることも賑わいに貢献します。空間の質を高める取り組みは、都市全体の質を改善するのに役立つことになります。

◆空間のエッジ（縁）を活用

人は立ち止まりたいとき、空間のエッジ（縁）に沿った場所を選択しやすいです。空間のエッジに身を置くと、他の歩行者の流れを妨げることなく、目立たず静かにその場にとどまることができます。建物の壁面や植栽などを適切に活用して、滞留空間を広場のエッジに配置すると、滞留活動が生まれやすいです。

◆噴水や高木、アートなどアクセントとなるものの配置

噴水や高木、アートなど広場のアクセントとなるものを、広場の中心から少しずらしておくと、空間に「変化」や「動き」が出て、人のアクティビティが重視された広場になりやすいです。

◆人の目により安心感を向上

広場の滞留者を増やすこと、広場周辺にキオスクやオープンカフェなどを配置することは、賑わいのある空間を創出すること、コミュニティを育むことに加え、人の目が増えることにより監視性が高まり、広場周辺の安全性・安心感の向上にも寄与します。

広場とその周辺の利用状況の
評価のしかた
について考えてみましょう。

③ 広場の評価について

- 賑わいのある広場をつくるためには、空間条件だけでなく、広場でみられる人のアクティビティを評価することも大切です。
- また、観察的手法を用いて、歩行者行動に関する客観的な情報を収集し、広場の実態を把握することも大切です。
- 定性的に様々な視点で評価することにより、広場の機能を幅広くとらえて、街全体の魅力向上に寄与する広場づくりを目指しましょう。

評価方法の考え方

- 広場では多様な活動が生まれており、広場の賑わいを評価するのに画一的な定量的手法は向いていません。そこで、本マニュアルでは、幅広く現象を捉えられるよう、定性的な評価手法を紹介します。
- 評価基準は、他の手法に多くみられるような空間的な条件によるものではなく、そこで行われているアクティビティにより評価を行います。
- 具体的には、①行動の多様性、②利用者の多様性、③利用者の数、④(広場)周辺との関係に着目して評価を行います。
- 評価には、観察的手法により収集された歩行者行動に関する客観的な情報を活用し、広場の実態を把握しましょう。

評価基準の説明

◆ 行動の多様性に関して

A 好ましい ― **B** ― **要改善 C**

- 知らない者同士がちょっとした会話やアイコンタクトする様子が見られる
- 子供の遊ぶ様子を他の利用者が眺めるなど、見る/見られるという関係がある

- 本を読むなど楽しんで時間を過ごす人がいる
- 飲食している人がいる
- 短時間利用と長時間利用が混在する

- 特定の行動（煙草を吸う、スケボーをする、など）に限定されている
- 滞留行動があまりない。

◆ 利用者の多様性に関して

A 好ましい ― **B** ― **要改善 C**

- あらゆる年齢層、性別、属性の利用者が混在する。
- 女性の利用者が多い。
- 観光客と市民の両方の利用者が共存する。

- グループの利用者が多い。
- 時間帯によって、異なる属性の利用が見られる。
- 仕事、買物など、異なる目的での移動途中に使われている。

- 特定の利用者層（若者のみ、高齢者のみ、など）に限られる。
- 女性の利用者が少ない。
- 常に特定の人が長時間にわたって占有している。

◆ 利用者数に関して

A 好ましい ― **B** ― **要改善 C**

- 平日も休日も、常に利用者がいる状態になっている。
- イベント時以外の通常時にも、一定の利用がある。

- 平日のランチタイムや夕方、休日の昼間など、周囲の人通りが多い時間に利用者が増える。
- イベント時に多数の人が集まる。

- 周辺の人通りに比べて、常に利用者が少ない。
- 全く誰もいない状態が多く見られる。

◆ 周辺との関係に関して

A 好ましい ― **B** ― **要改善 C**

- 近隣の店舗で買ったものを広場で飲食する。
- 買い物の後に広場に立寄り、また別の店舗を回遊しはじめる。

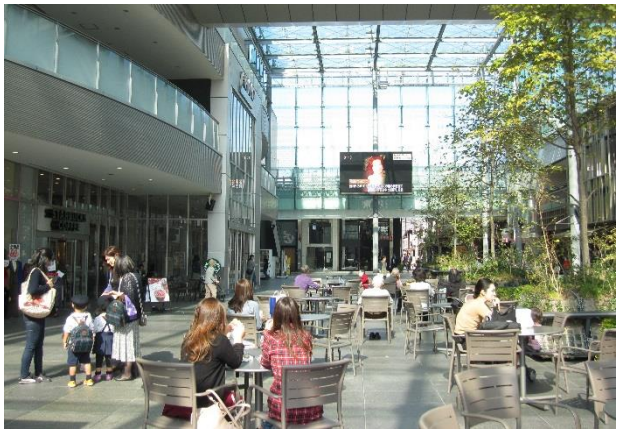
- 広場を経由することで周辺を便利に移動できる。
- 移動途中に休憩したり、待ち合わせしたりできる。
- 広場沿い店舗の利用が促進される。

- 広場の存在が周辺の歩行の妨げになっている。
- 広場によってエリアの印象の低下を招いている。

評価の例（広場事例）

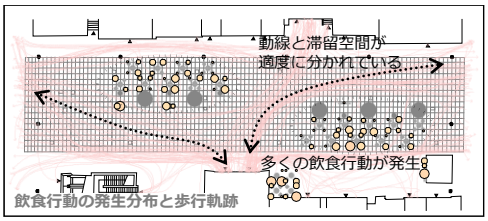
G広場（T市）

類型　A（中心エリア／複数交差）
ア（かこまれ／店舗多）



会話している人たち

遊ぶ子供とそれを眺める大人



飲食行動の発生分布と歩行軌跡

「行動の多様性」に関して

- 広場に別々に訪れた人たちがあいさつを交わしたり、会話している様子が見られる。
- 小さな子供が遊ぶためのスペースが設けられており、遊ぶ子供たちを眺めながら休憩しているお年寄りが多く見られる。
- 本を読む、飲食する、仕事をする、犬の散歩をする、仮眠をとるなど様々なアクティビティが見られる。

評価

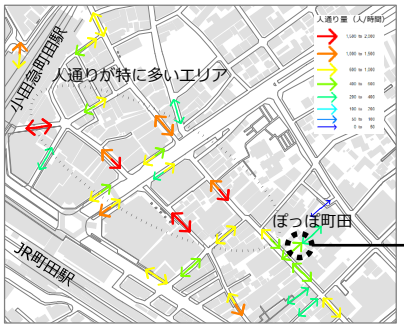
➡ **A**

P広場（M市）

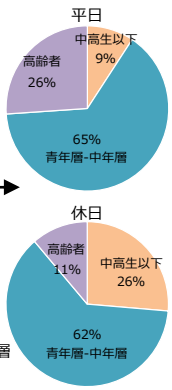
類型　C（中心エリア／一本）
ア（かこまれ／店舗多）

平日の賑わいの様子：ゆっくり食事を楽しむ

休日の賑わいの様子：イベントを楽しむ



町田エリアの人通り分布（休日）



平日と休日で利用者層のバランスが変化

「利用者の多様性」に関して

- 広場は駅周辺の人通りの多いエリアの端部に位置するが、平日・休日ともに多くの人で賑わっている。
- 平日は飲食などをしながらゆっくり過ごす高齢者層の人が多く見られる。一方で、休日は中学生以下の子供も多く見られるなど、多様な年齢層に利用されている。

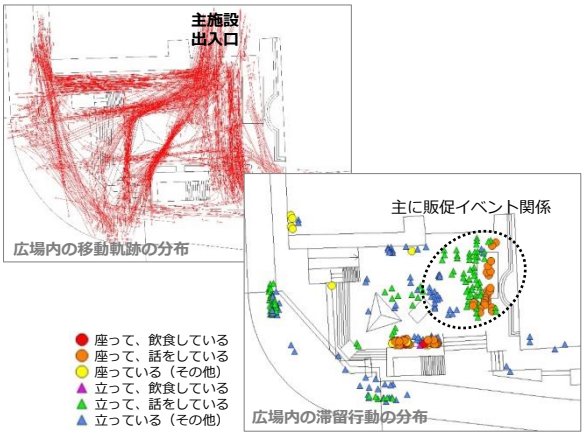
評価

➡ **A**

評価の例（広場事例）

K広場（K市）

類型　C（中心エリア／一本）
ウ（かこまれ／店舗少）



「利用者数」に関して

- 広場周辺の人通りは多く、広場に面している商業施設に出入りする人は多いなど、人が集まりやすい条件にあるが、休憩できる場所が少なく、広場利用者（滞留者）は少ない。

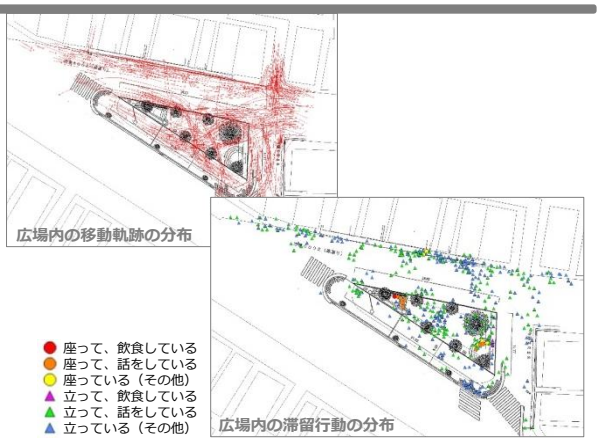
⇒ 建物壁面を活用した囲まれ感のある滞留空間、人通りを眺められる座席配置など、居心地の良い滞留空間の形成が大切。また、商業施設の催事や近くの商店街のイベント広場としての活用も考えられる。

評価

➡ **C**

H広場（O市）

類型　A（中心エリア／複数交差）
イ（さらされ／店舗多）



「周辺との関係」に関して

- 以前は建物があった場所が広場になった空間であり、広場を経由することで周辺を便利に移動できる。
- ただし、テイクアウトしたものを食べるような滞留行動はあまり見られず、街の回遊行動を活性化する機能を十分に果たしていないと考えられる。

⇒ 開放性を活かしつつ気軽に立ち止まれる滞留空間、座席の配置等により、日常的に歩行者が立寄り、滞留する場所を目指すことが考えられる。

評価

➡ **B**

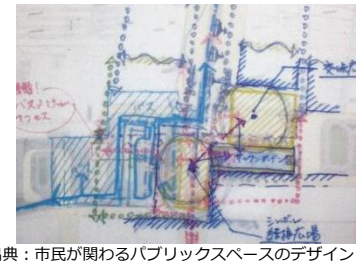
最後に、広場の
計画・整備・運営
に関する留意事項をご紹介します。

④ 広場の計画・整備・運営について

- 本マニュアルは主に空間レイアウトおよびそれに関連した広場評価に関するノウハウを紹介するものですが、良い広場空間をつくるためには、実際の計画・整備・運営のそれぞれを適切に実施することが重要です。
- ここでは、文献調査および専門家ヒアリング等を通じて得た、計画・整備・運営に関する主な留意事項を紹介します。

計画に関する留意事項

- 計画の初期段階では、整備後に広場がどのように使われるのか、立地・周辺環境などを十分に分析し、広場整備の是非を検討することも大切です。



出典：市民が関わるパブリックスペースのデザイン（小林正美，2015）

- 人々の動線が重なる場所、集客施設の前や駅前など、まちにおける回遊の核、賑わいの核となりうる場所は、どの都市にも何らかの形で存在します。周辺環境との関係性を考慮しながら、そうした場所に広場的な空間を確保し、広場周辺への波及効果を生み出し、まちなかの魅力向上を目指すことが大切です。

写真提供：松山アーバンデザインセンター

- 市民、行政、専門家および関連団体代表者たちが連携し、一つのプロジェクトを広く公開しながら検討、推進していくことによって、公共空間のパブリック性が高められます。

- 計画段階において市民ワークショップなどを開催し、一般市民が計画に参加することによって、公共空間に対する市民の参加意識・所有意識が高められます。そういった意識は、オープン後、関係者のより積極的な運営参加へと繋がっていきます。

- 広場周辺の人通りや既存の広場等について観察・調査を行い、そのデータ等を用いて客観的な根拠に基づき計画を立てていくことも重要です。

富山グランドプラザにおける観測の様子

参考文献

賑わいづくり施策「発見」マニュアル

著者：国土技術政策総合研究所

出版年：平成26年

オープンスペースを魅力的にする

著者：プロジェクト・フォー・パブリックスペース

翻訳：加藤 源 、服部 圭郎、鈴木 俊治、加藤 潤

出版年：平成17年（原著 平成12年）

整備に関する留意事項

- 設計（デザイン）は統合の作業であるため、本マニュアルの個別項目に従うだけでは十分ではありません。検討の際には、能力の高い専門家との協働作業が効果的です。

写真提供：東京大学 復興デザイン共同体

- 広場の立地や目指す機能に応じて、建築、ランドスケープ、環境、照明、歩行者動線、コミュニティなどの適切な専門家によるチームで設計案の検討を進めることも効果的です。

- 本マニュアルは主に空間のレイアウトについて説明していますが、それ以外のデザイン要素（素材、ディテール、植栽など）についても多くの知見を活用することが考えられます。

- 整備段階においても、計画段階での市民ワークショップなどの枠組みを活用し、関係者が広場づくりそのものにも参加することによって、連続的でやがて持続的な運営につながる機運が醸成されます。立地的に身近な関係者など、広場空間との関係性の強い主体による参加が望まれます。

写真提供：ＵＤＣＭ

参考文献

市民が関わるパブリックスペースのデザイン

著者：小林正美

出版年：平成27年

Public Places Urban Spaces

著者：Matthew Carmona、
Tim Heath、
Taner Oc、
Steve Tiesdell

出版年 :平成22年

運営に関する留意事項

- 現場の状況に即した柔軟な管理を行うためには、地域の団体などが管理に参加することが有効な手段です。計画段階からの参加とあわせて、活用と維持管理を地域に委ねることにより、地域のニーズに即したきめ細やかな運営が可能になります。

- 常に美しく空間を保つことも大切です。ゴミが落ちていない環境をつくりポイ捨てを抑制したり、テーブル・椅子を美しく配置して、空間イメージを改善することで、安心感のある空間が形成されます。

- 広場周辺の店舗営業者と連携した運営・活動を増やすことが、日常的にアクティビティあふれる広場空間の実現に効果的です。広場を様々な視点から活用できる人材を増やしていくことが大切です。

- 立地条件等によっては、積極的にイベントの開催頻度を増やすことを試みることも大切です。一過性のものに終わらない、持続性の向上につながる様々な効用があるはずです。

出典：市民が関わるﾊﾟﾌﾞﾘｯｸｽﾍﾟｰｽのﾃﾞｻﾞｲﾝ
（小林正美，2015）

- 定期的に広場の利用状況の調査等を行い、広場が適切に機能しているかどうか、地域のニーズにあっているかどうか確認することも大切です。

参考文献

にぎわいの場 富山グランドプラザ

著者：山下裕子

出版年：平成25年

Place-Keeping

著者：Nicola Dempsey、
Harry Smith、
Mel Burton

出版年：平成26年

この手引きが、全国におけるより良い広場空間づくりの一助になれば幸いです。

お問合せ先　国土交通省 国土技術政策総合研究所
都市研究部 都市施設研究室
nil-tosisise@ki.mlit.go.jp

平成29年6月